大村市竹松遺跡で弥生時代後期の墳墓群から埋葬施設の上に石を立てて標石とした墓が発見されました。

また、火葬された死者の骨を粉砕したものを祭祀遺構に撒く、祭祀行為（葬送の最終段階）がおこなわれたことが推測される遺構を発見！！

平成２４年～２５年度・九州新幹線西九州ルート（長崎ルート）建設工事に伴う竹松遺跡発掘調査で、調査区域の約１，２００㎡の範囲内に弥生時代後期（約１，９００年前）頃の箱式石棺墓・甕棺墓・土坑墓の墳墓群と葬送に伴う祭祀遺構が発見されました。

祭祀遺構では、西日本ではじめて、弥生時代の遺跡から焼人骨を含む土坑が検出される特殊な葬送儀礼の一環が明らかになりました。

墳墓群の特徴としては、西北九州地方で初めての箱式石棺墓の上部に板石を立石したもの２基と墳墓群の中に自然石を立石したもの４個が発見されました。また、箱式石棺墓１２基の内面及び土坑墓２基には、水銀朱を主とした赤色顔料を塗布した痕跡が明らかになりました。

Ⅰ．竹松遺跡発掘調査で、弥生時代後期の箱式石棺墓が２１基、甕棺墓３基、石蓋土坑墓２基、土坑墓４基、土坑９基の総数３９基の墳墓群

や標石４個と、火葬された死者の骨を粉砕したものを撒く、葬送行為が窺える祭祀遺構等が発見されました。

１．　墳墓群内で、墓標として考えられる立石をもつ特徴的な墓が２基発見され、箱式石棺墓に盛土を行い、標石を立てている箱式石棺墓の造営構造が明らかになりました。

（１）標石をもつ、箱式石棺墓の埋葬施設の造営構造について

①第１号箱式石棺墓を埋納した土坑の縁を自然石で囲い、その中に自然石や土を用いて約０．５～０．６mの盛土を行う。遺体の頭部付近の盛土の中に、標石として扁平な板石１個を立て、盛土の上面には５枚の扁平な板石を敷き並べたもの。

②第３号箱式石棺墓の直上部に遺体の頭部付近に当たる部分に標石として扁平な板石１個を立て、約０．２mの盛土を行ったもの。

（２）墓域の標石について

標石１～４は、墓域の標石としてそれぞれ自然石の円礫１個や板石１個を立てたもの。

（３）墓標としての標石をもつ箱式石棺墓の検出から鑑みて、遺体を納めた石棺に石蓋を乗せ、遺体の頭部の位置に当たる付近の石蓋上に板石を立て、全体に盛土を行っている状況が検出されたことは、弥生時代の埋葬施設の造営を知る上で貴重な発見です。

また、墓域に標石を立てることにより、墓域の占有や祖先祭祀の場として、墓域の構造を解明する貴重な資料と考えています。

この様な墓制の検出は、西北九州地方で初めて発見されたものです。

２．　墳墓群の内、赤色顔料が箱式石棺墓１２基と土坑墓２基の１４基が検出されました。主に、石棺の内面及び側石の継ぎ目に塗布されるとともに葬られた遺体の頭部や腹部の位置付近に撒かれた状況

で顕著に観察されました。

３．第１５号箱式石棺墓の棺床面には、被葬者の衣類等の一部と推察される布の繊維片が出土しました。

また、副葬品が出土した墓は、３基で管玉１点・ガラス小玉６点が出土しています。

Ⅱ．祭祀遺構では、供献土器を伴う土坑とその土坑を埋め、上部に浅い土坑を作り、別の場所で火葬された焼人骨がこの場所で撒かれたと推測される祭祀行為の一端が窺われる遺構が発見されました。

また、少し離れて葬送時に使用されたと考えられる高坏や器台等の遺物が集中する祭祀遺構も検出されています。

１．焼人骨が検出された土坑の形成について

（１）第１段階は、現存長約２．６m×幅約１．５m×深さ約０．４５mの不定形な土坑が掘られ、その中に、供献用の遺物と考えられる弥生時代後期前葉のほぼ完形の壷形土器や台付の甕形土器等の遺物が発見されました。葬送儀礼のために構築されたものと考えられます。

（２）第２段階は、第１段階の土坑を埋め、土坑の中心部分に、新たに長さ約１．８m×幅約２m×深さ約０．２mの楕円形状の浅い土坑が掘られる。この中に他の場所で火葬され、破砕された焼人骨が、撒かれた状況で検出されました。

何らかの理由で、新たな場所に特殊な焼人骨を撒いて、葬送儀礼が行われたものと推測されます。

また、焼けたガラス小玉１点と鉄製刀子２点及び炭化物、焼土塊、灰が、焼人骨に混じって出土しています。

２．死者を火葬する行為は、死者が忌まわしい病死や事故死等の

要因により、墓域全体を浄化する等での葬送儀礼が行われたのではないかと推測されます。

３．今回の発見は、供献用土器を伴う土坑で葬送儀礼が行われたと推察され、その後、土坑を埋め、余り時間の経過を経ない段階で、新たに土坑中心部分に浅い土坑を掘り、その中に焼人骨を撒き、葬送儀礼（葬送の最終段階）が行われたものと推測されます。

このような葬送儀礼の一端が窺われ、弥生時代の西日本でも例を見ない貴重な発見です。

４．高坏や器台等の遺物が集中して出土する祭祀遺構が一箇所検出されました。葬送時における祭祀の用途に使われたものと推測されます。

Ⅲ．墳墓群の発掘調査で、墓の周辺より小型仿製鏡（内行花文鏡）や銅鏃が各１点出土しています。小型仿製鏡は、出土状況より本来は墓に副葬されていたものと考えられます。また、鏡や墓に水銀朱等の赤色顔料を用いていることからも拠点集落の有力な被葬者と推測されます。

１．発見の意義

（１）竹松遺跡では、弥生時代後期の箱式石棺墓ほか３９基の墳墓群や標石と祭祀遺構が発見されました。

ア．墳墓群の特徴は、標石をもつ特徴的な箱式石棺墓２基と墓域の中での４個の標石のあり方や箱式石棺墓・甕棺墓・土坑墓（木棺墓）の墓制の違いが見られるなど、集落での共同墓地造営の在り方や集団内での葬制の違いなど、弥生時代の葬制を解明する貴重な墳墓群であることが明らかになりました。

イ．　祭祀遺構は、火葬した遺体の骨を破砕した焼人骨を別の祭祀場所

に持ち込み・撒かれた状況で、葬送儀礼がおこなわれたことが窺い知れるなど、特殊で貴重な遺構が発見されました。

今まで、弥生時代の葬制では、死者を火葬することや火葬した後に人骨を破砕し、祭祀行為をおこなうなどの葬送行為（葬送の最終段階）が行われたと推測される祭祀遺構は、西日本では知られていません。

今後は、弥生時代の葬送儀礼の一端が窺い知れる貴重な史料として、詳細に検討する必要があります。

（２）赤色顔料は、ベンガラと水銀朱があります。ほとんどの水銀朱は、中国から輸入された貴重品で、ベンガラは日本各地で作られています。赤色顔料が塗布及び撒かれたれた状況で検出された墳墓に埋葬された被葬者は、身分の高い人と考えられます。

赤色顔料を墓に使用することについては、悪霊や鬼神から死者を守る（壁邪）役割が想定されます。

（３）竹松遺跡では、今後の調査によって、集落の規模や環濠、水田などの生産区域、住居区域など遺跡の構造が明らかになることが期待されます。

遺跡遠景　南から　大村湾を望む

遺跡遠景　北から　大村扇状地の扇頂（坂口方面）を望む

弥生時代墓域　全景（昨年度撮影）

墓域近景（北東から）

第１号箱式石棺墓（手前）

第３号箱式石棺墓（奥）

標石のある墓

第３号箱式石棺墓

第１号箱式石棺墓　検出状況

第１号箱式石棺墓の配石をはずした状況

（盛土の断面　石棺の蓋石が見える）

標石１

標石２

箱式石棺墓

第 17 号箱式石棺墓

西から

（頭部と足元に朱が見える）

同　頭部

頭部拡大

足元拡大

第 15 号箱式石棺墓

検出状況

棺内埋土を掘削後の様子

（頭部に朱が見られ、腹部には繊維片が見られる）

頭部拡大

第 8 号箱式石棺墓

検出状況

棺内埋土を掘削後の様子

棺材のつなぎ目に見られる赤色顔料

甕棺墓

第１号甕棺墓

第２号甕棺墓（後世の土石流により壊されている）

祭祀遺構１（焼人骨を検出した土坑）

南から（土層観察用ベルト交点部分に骨片が密集しており、供献用の壺と甕が見える）

骨片密集部分の拡大（北から）

供献土器出土状況

短頸壷出土状況

同　台付甕出土状況

祭祀遺構２

全景（東から）

同　拡大

墓域内出土遺物

棺や祭祀遺構から出土した玉類

墓域そばを流れる旧河川から出土した

小型仿製鏡

墓域そばを流れる旧河川から土出した

銅鏃